

廣池千九郎畑毛記念館における保存と展示

橋本 富太郎

目次

はじめに

一、廣池千九郎と畑毛温泉

二、富岳荘建設当時の保存と展示

三、畑毛記念館改修事業

四、改修後の畑毛記念館

おわりに——成果と課題——

キーワード…畑毛、『論文』執筆の部屋、富岳荘、保存、展示

はじめに

現在、廣池千九郎関係資料の保存と展示を行うモラロジー研究所所管の博物館施設「記念館」は、日本国

内に全部で五館存在する。順にあげると、廣池が設立した同研究所および麗澤大学のキャンパス内に立地し、全記念館の中核に位置づけられる「廣池千九郎記念館」（千葉県柏市）、大分県中津市に現存する廣池の生家を保存し展示室を付属する「廣池千九郎中津記念館」、廣池が主著『道德科学の論文』（以下『論文』と略す）の大半を執筆した部屋と晩年の別荘から構成される静岡県田方郡函南町の「廣池千九郎畑毛記念館」、廣池が門人たちのために開設した温泉の関連施設と展示室からなる群馬県利根郡みなかみ町「廣池千九郎谷川記念館」、そして同町に今も佇む臨終の地「廣池千九郎大穴記念館」、以上の五館である。

記念の対象である廣池千九郎という人物は、学者として実証性を重んじ、資料の収集に熱心であった一方、後世の活用配慮して保存についても大変周到であった。廣池千九郎記念館の収蔵庫には、廣池の小学校卒業証書から少年期に始まる日記、書簡、数では大半を占める原稿類など、残された文書類が十九万点にも及ぶ。さらに、遺墨が約二百点、蔵書は約三万二千五百冊、衣類や医療機器、生活雑貨などの遺品は約千六百点と、廣池の薫陶を受け彼を慕う門人たちによって徹底した保存が講じられ現在に至っている。五ヶ所にもおよぶ記念館が存立するものこのような経緯によるものである。

本稿では、このうちの「廣池千九郎畑毛記念館」（以下「畑毛記念館」と略す）について博物館学的研究を試みた。畑毛記念館は、廣池自身が生前、具体的に記念館的施設として保存と活用を指示したものであり、そのような扱いは五館の中で唯一といってよいケースである。それだけに、当施設には廣池の「保存」や「展示」といった博物館意識が随所に見られ、さらに道德の教育者・廣池千九郎ならではの特色が顕著に表れている。一方、畑毛記念館は平成十九年（二〇〇七）の講堂竣工をはじめ、「論文」執筆の部屋（以下「執筆の部屋」と略す）の移設、別荘「富岳荘」の改修と展示室の新設など、近年大幅な改変と復元の事業を行っ

た。装いを新たにした畑毛記念館に関する文献は、五館全体の中における位置づけや訪問の意義など、井出元氏によるすぐれた解説がすでに複数存在する。しかし、掲載誌がモラロジー研究所の「所報」という会員向け広報誌であり、目的も紙面も相応の制約があったため、短編の総論に留められていて、氏の精緻な研究成果が広く周知されたとは言いがたい。また記念館整備の過程で、当事者により多くの検討と判断が積み重ねられ、示唆に富む事例も豊富なのだが、まとまった記録がないために、それらがこのまま埋もれてしまいかねない状況にある。

そこで今回は、畑毛記念館を博物館として位置づけることを手がかりに仔細に検討してみることにした。まず廣池自身の関連事跡をできるかぎり再調査し、続いて近年の事業について、実際に関わった筆者の見聞を踏まえつつ、目的や成果などについて意義づけたい。

一、廣池千九郎と畑毛温泉

(一) 長期にわたる深い関わり

畑毛記念館が管轄する内容は、言うまでもなく廣池千九郎と畑毛温泉に関係する事跡である。事跡の特色をあげれば次の二点となるだろう。まず、当地との関係が、明治・大正・昭和の三期にわたって断続的に三十年以上の長期におよび、明治期が『古事類苑』編纂期から神宮皇学館教授時代の温泉療養、大正期が『論文』執筆没頭、昭和期が最晩年の別荘建設および記念館化と、三期のそれぞれにまったく異なる特色をもっているという点があげられる。次に、二期目の大正期が、人生で「いちばん苦勞³⁾」して『論文』執筆に専念

したという廣池の事跡上極めて重要な位置を占めているという点である。畑毛における事跡については、『廣池千九郎日記』⁽⁴⁾をはじめ、井出静・大父子、中田中、廣池富らによる記録に詳しく、これらを基にした『伝記 廣池千九郎』に簡潔にまとめられている。本章ではこうした諸氏の記録をもとに記念館化の前提となる廣池の事跡を確認しておく。

(二) 明治期

当地と関わるそもそものきっかけは、体調を崩した廣池が湯治のために訪れたことにある。最初の訪問に關する記述は、本人は書き残していないものの第三者によるものがいくつか残されており、初訪問は明治三十年代であることは確かかなようだが、それぞれに時期の相違があり正確な年月日は今のところ特定できない。

もっとも古い時期を示しているのは中田中の『思いでの旅』⁽⁵⁾で、「(廣池)博士と畑毛の因縁は遠く明治三十五年から」としている。その後刊行された『温故知新』⁽⁶⁾、『伝記 廣池千九郎』⁽⁷⁾もこの説を採っているらしく、明治三十五年である。次に古い時期を記すのは、明治三十六年十月二十六日と日付まで明記した井出静の「廣池博士と畑毛温泉」⁽⁸⁾となる。しかし、井出静にはこれ以前に、明治四十年ごろと思われる時期を指していたこともあった。⁽⁹⁾

このように決め手のない状況であるので、畑毛記念館に關する映像資料「畑毛記念館 皆自得道還」⁽¹⁰⁾では、「畑毛温泉にはじめて来た記録は定かではありませんが、明治三十八年ごろ、ぬる湯が畑毛にあると人から聞いて来ました」と断定を避け、井出元氏も「初めて訪れた日は定かではありません」というように時期は

不明としている。

三十七年以降については、同時代史料で跡付けることができる。

第一に、廣池宛の書簡の宛先住所が畑毛になっているものがそれにあたる。明治三十七年九月六日消印の木村春太郎からの書簡をはじめ、十二日の小野（名不明）、同日と九月十五日の木村春太郎、十六日の山本信哉、三十八年八月十三日の津軽英鷹、四十年一月十日の金沢庄三郎らによる書簡が「畑毛」になっている。⁽¹²⁾次に、旅館「琴景舎」の宿帳である。宿帳には、四十二年四月五日から九日までの滞在と、四十四年八月二日から十三日までの滞在の記録が廣池自筆により残されている。⁽¹³⁾

後者については廣池の次女富の回想録が存在していて、このときの滞在の特質が活写されている。明治四十四年、単身赴任先の伊勢から帰京した廣池は、妻春子に対して「皆で揃って畑毛温泉に行こう」と、夏休みを利用して家族そろってバカンスに行くことを提案した。普段、家庭を顧みずに研究一筋の千九郎にとつては極めて異例の提案である。春子は「思いがけない嬉しい話に、心から感謝して喜んだ」⁽¹⁴⁾が、心臓病の次男千巻を連れて行くには困難が予想されたため、春子と千巻は留守番し、廣池と長男千英、長女とよ、次女富の四人での畑毛行きが決まった。前述の宿帳に記された八月二―十三日の滞在がこれにあたる。廣池が家族に対して珍しくこのような提言をした背景には、前年の二見今一色での「誠の体験」による精神的深化を経験し、年末には学位論文を提出して研究も一段落し、心理的に平安の訪れのようなものがあつたのではないかと思われる。

畑毛滞在中にも続くこの傾向は富の回想に詳しい。温泉に浸かりながら唄を「くり返し口ずさむ父の顔は、安らかであった」し、母を思い出していた富を氣遣い「お父さんがおんぶしてあげよう」と言って、兄

と姉が驚いたように目を見張るのをよそに父の愛情を示したりした。⁽¹⁶⁾ 畑毛温泉における事跡については、廣池のこのような家庭的に安らいだ姿ももつと注目してみる必要があるのではないだろうか。

(三) 大正期

『廣池千九郎日記』には次のようにある。

大正十二年八月十四日 畑毛へ入浴に決定し、午前八時二十五分東京駅発、二時伊豆仁田駅へつく。

一 欲一時間余、皮膚に力づきしことを覚ゆ。⁽¹⁷⁾

『日記』からは、この日畑毛温泉へ転地したことに加え、旅の行程とさつそく温泉の効能があったことがわかるものの、畑毛を選んだ経緯などは記されていない。そこで第三者の記述で補っておくと、『東洋法制史』が、ほぼ完成に近づいた頃のある日、静養のためにこの地を訪ねられた博士のおからだに、この温泉がことのほか効いたので、道徳科学の論文を執筆される時には、この畑毛を選ばれ、御療養をかねて伊東、矢熊など行き来しながら執筆され⁽¹⁸⁾たのであり、「東京の自宅に比較的近いこと」や「温暖な気候」⁽¹⁹⁾も決め手だった。

今回の畑毛における滞在は、一貫して旅館「琴景舎」であり、古くなって客を泊められずに物置になっていた「離れ」を借りて住んでいた。中田中によるとこの建物は「廊下の板は朽ち、穴のあいたところには石油箱の板をはりつけてあり、タタミもボロボロ、座ると着物にゴミだの虫だのがくっついてくるかと思う

ような有様⁽²⁰⁾であり、春子が訪ねてきたときには「座布団の上に立って、着物の裾が座布団からはみださないようにしてすわって、『あんだ、よくもよくもこんな汚いところに』なんて言っただけだ⁽²¹⁾」ことがあるほどだったという。

壮絶を極めた『論文』執筆の様子は、当時廣池に仕えていた香川初音の回想から鮮烈に伝わってくる。生活は「お部屋ばかりでなく、身のまわり一切が実にお気の毒なほどご質素⁽²²⁾」であり、昼夜を分かたぬ原稿執筆中、発熱と発汗に度々見舞われ、その都度温泉に入り症状を和らげ、また原稿執筆に入るというくり返しであった。病床で苦しみながらも筆を離さない廣池に対して、香川がたまりかねて休息を勧めると、廣池は次のように答えている。

奥さん、この筆は死ぬまで離せないのです。自分は神様を欺くことはできません。(中略)この弱い体では論文の原稿が書き上げられるかどうか分からない。たとえ書き上がったとしても、いつ印刷となり書物になるかそれもわからない。幸い書物となっても、果たして人様が読んでくださるかそれもわからない。読んでくださっても助かっていただけられるかどうか分からない。しかも今の人が助かって、五百年、千年の後の人が果たして助かっていただけられるかどうか分からない。

奥さん、私の一生は全く暗がりの道を歩いている。けれども一生書き続けねばならぬ。世の中の人が一つわかっていてくれたらナア……こんな苦勞はいらぬ。古今東西の大部分の書物を集めて研究を重ね、ただ一つをわかからせたいために、この弱い体にむちうって人の助かる道を書き続けねばならぬ⁽²³⁾

廣池は執筆に平行して反省に反省を重ね、自己を磨きつつ一字一句に全人格と人類の平和幸福の願いを込めて書き上げていった。⁽²⁴⁾ こうして大正十五年八月十七日『論文』は完成する。

(四) 昭和期

昭和十三年一月二日、畑毛の井出静のもとへ廣池から電報が届いた。五日に畑毛に行くので琴景舎を手配するようにとのことである。しかし折り悪く琴景舎は満室で、交渉しても部屋を空けてくれる見込みがなかった。井出がそう報告すると廣池は、琴景舎での宿泊はやめにして別荘を建てることに決め、二百坪を温泉付きで購入するよう指示した。土地の購入には困難が伴ったものの、井出の尽力により、二十八日には坪当たり三十円・温泉付きの土地二〇〇坪の売買契約が所有者の森五商店との間で交わされている。三十日に着工されるとわずか十五日間で工事は完了し、予定通り二月十七日に当地に訪れた廣池は、別荘に「富岳荘」と命名した。⁽²⁵⁾

その後廣池は度々富岳荘へ療養に訪れている。最後の滞在は四月四日から九日、翌十日に行われる賀陽宮恒憲王への御進講に備え体調を整えるためであった。

廣池による富岳荘建設の目的には、療養のために別荘を求めたことのほかにもう一つ、『論文』を執筆した部屋の保存があった。「わし亡き後の門人のために、命をかけて苦勞した記念すべき部屋を残しておきたい」という趣旨である。『論文』執筆に使用した部屋は、このときには旅館から切り離されて移築の上、物置になっいて、ますます朽損が進んでいた。富岳荘建設と平行して琴景舎との間で交渉を交わし、これを譲り受けて富岳荘敷地内に移築して保存することになった。

二、富岳荘建設当時の保存と展示

(一) 『論文』執筆の部屋の保存

執筆の部屋を併設して富岳荘は、「畑毛に記念すべき建物を残して逝きたいとかねてから思っておった」という廣池の思いを結晶化した。「記念すべき建物」たる執筆の部屋と富岳荘は、この時点ですでに「記念館」であったといつてよい。

記念館完成に際して、モラロジの原典である『論文』と執筆の部屋との関係について、廣池は次のように語った。

原典の点一つにも生命（慈悲）が入っている。これを綴った至誠慈悲の充滿した部屋じや。⁽²⁸⁾
 最高道徳の価値を説くのが、モラロジじや。最高道徳そのものは述べられぬのである。モラロジの原理によってその偉大さを示しているのである。原典を深く理解し、その奥の真理はこの部屋で得るのである。⁽²⁹⁾

『論文』執筆に込められた思いを、それが充滿したこの部屋から感じてほしい、そして原典によってモラロジを知的に理解した上に、「奥の真理」はこの部屋で得てほしいとのことである。また、さらに一歩進んでこの部屋における「更生」にまで言及した。

モラロジーを学び、理解してくると、たくさんの人がここを訪ねて来る。広池先生はどんな人だったのだろうか。そして、最高道德の真の姿を心でしっかりと観て還るのじゃ。最高道德は天地の法則にして無形のものじゃ。ここは真に更生してもらおう部屋である。神智に本づき努力した部屋じゃ。わしの慈悲の魂を受取るのじゃ。命と魂を打ち込んだ部屋じゃ。⁽³⁰⁾

以上の言葉からわかるように、モラロジーに説く最高道德の真の理解のためには、この部屋を訪れて原典執筆の苦勞を知り、部屋に籠る生命に触れることが肝要である。そのために執筆の部屋を保存して後世に伝えることは、最晩年の廣池にとつて不可欠な事業であった。

(二) 廣池による展示

博物館用語としての「展示」は「資料を媒体とした情報の伝達⁽³¹⁾」と定義されている。ここでいう「資料」とは、博物館の収蔵品を表す言葉であり、歴史的建造物等の文化財もこれにあたる。この観点から見たとき、畑毛記念館における展示は、「執筆の部屋」および「富岳荘」という資料を媒体とした情報の伝達であり、「情報」は何かというと、廣池に関連する「道德性」ということができるだろう。

廣池は富岳荘を建てる際、「柱一本板一枚庭木一本植へるに石一つ泉水に到るまで教育になる様参考になる様に⁽³²⁾」と指示しており、「道德性」という情報を伝達するための工夫が随所に見られる。当時、次のように語っていた。

この建物は一見貧弱に安物に見えるが、家として大切なところには最も立派な上質な材木を使用している。梁を見よ、廊下の桁を見て下され。飾り柱の床柱は一番の安物を使っている。何事も実質本意、本末に従って人心救済の心を表現するのじゃ。将来伊豆半島には地震があるぞ、この辺は地震発生の地帯じゃ。わしの建てた家が一番に倒れば教育にはならぬ。道德の先生の家はさすがに最後まで残ったと言われるように、何もが範とならねばならぬ。⁽³³⁾

廣池は、材木の使用方法に「本末」に従った「人心救済の心」を表現した。富岳荘は、支柱、梁、桁など建物の骨格を構成する箇所には良材を用いる一方で、装飾品にはあえて粗略品を用いている。確かに、梁や桁は見るからに太い。それに対して、床の間の飾り柱である「床柱」はどうかというと、虫食いだらけの安価な杉材が用いられている。普通に考えれば何もわざわざ虫食いの品を使うことはない。そこにあえて使用するところに視覚的効果を期待しているのである。こうした材木の使い分けによるコントラストは見事な「展示」であるというほかない。一見して「本と末の軽重」という情報が伝達されるのである。

さらに、富岳荘は人目に触れない天井裏の構造も頑強である。目に見えないところに気を配るといふ「至誠」も体現されている。

また建物の配置にも、次のように指示して周到な注意が払われた。

『論文』編纂の部屋は富岳荘の床の間の後ろにて、わしの部屋より三尺余高き所に移築して、床の間の

「神様を拝すると同時に、『論文』編纂のお部屋も共に拝するのじや。」⁽³⁴⁾

執筆の部屋は、富岳荘の床の間の壁の裏側に配置された。床の間には神棚が置かれており、これを拝すると、壁の向こうの執筆の部屋も同時に拝することになるのである。また、三尺という高さによって部屋を尊重するという姿勢が伝えられている。

しかしこの場合、壁の向こうであるため執筆の部屋を視覚的に見ることができない。ここでは見るのではなく、感じるものが求められているのである。これは視覚にうったえないものの、情報の伝達が行われるということ、特殊な展示とみなすことができる。このように拝礼対象をあえて見えないようにする構造は、寺院における「秘仏」など、我国の特色として知られる信仰形態との関連が想起される。すなわち、インドにおいて発生以来、偶像として視覚的に展示されることが常識であった仏像が、我国に渡来して年月を経るうちに、奥にしまわれて見えないう方向に発展した形態である。こうした変容には、神々は目で見るものではないとする神道の影響があるともいわれている。当の神社においても、里宮と山宮（奥宮）の関係のように、身近に参詣できる里宮への拝礼を通して、彼方に存在する山宮をもともに拝礼するという形態がある。例えば、浅間大社とそのご神体である富士山との関係である。富岳荘床の間と執筆の部屋との関係は、以上のような我国の伝統的習俗にも添った構造をもっていることができるだろう。

もっとも、富岳荘を出て外から回りこめば、執筆の部屋を見るのも触るのも簡単である。廣池は、後世の人々に執筆の部屋から多くを感じ取ってもらいたいと願い、複眼的に多様な接点を形成していたのである。

(三) 門人たちの廣池に対する配慮

富岳荘建設にあたり、門人たちは衰弱した廣池の心身を少しでも安んじたいとの思いでさまざまな配慮を施した。井出静は「いつも御横臥中の博士に、あの日本一の富士山をそのまま、御床の中から御覧になれたら定めしお慶びとお慰みにもなるかと存じて高さ、角度等苦心致しました⁽³⁵⁾」と記している。また、「池も御居間の縁から椅子におかけになつて御覧になる様設計⁽³⁶⁾」し、「寒中咲きほこる香り高い梅の木約二十本、赤白一重、八重、早咲き、晚咲と色々取交せて冬の畑毛でのお慰めと梅に添えてお好みの南天を配し又香り高い珍しい百檀の木を南縁に近く、秋を飾る紅葉の太木」を配する等、敷地内には門人たちの師を想う気持ち⁽³⁷⁾が満ちていた。廣池も「建築の具合と温泉、温度、光線、換気等申分のない設計に如何にもお気に召した様子⁽³⁷⁾」であつたという。

以上のように、畑毛記念館では関係者の精神がさまざまな構造物の中に込められており、それらが「道徳性」という情報を伝達する資料と化して豊富な展示を構築しているのである。

これに加えてもう一つ、門人たちの働きについて見逃せない点は、「急いで建つ事⁽³⁸⁾」という廣池の期待にこたえ、驚異的な速さで竣工させたことである。この目的を遂げるため、別の場所であらかじめ製材した部材を現地で一気に組み上げたり、壁は塗装していたのでは間に合わないの、当時、建材としては珍しかったベニヤ板を使用したりした。こうした工夫の甲斐あって、短い工期に間に合わせることができ、廣池も「天祐だ神業だ⁽³⁹⁾」と称えて喜んだという。

現在でも、富岳荘の壁がベニヤ板でできているのを見られることにより、このような尽力と創意工夫の歴史を鮮やかに思い起こすことが可能なのである。

三、畑毛記念館改修事業

平成十七年、畑毛記念館の敷地拡張にともない、講堂の建設と執筆の部屋の移設および諸々の改修の事業が開始された。

執筆の部屋の移設計画が浮上した背景には次のような事情がある。琴景舎から譲り受け、富岳荘の床の間の裏に移築された執筆の部屋であったが、その場所が崖下に位置し、流れ落ちてくる雨水のために建物が湿損する恐れがあった。そこで昭和五十年ごろ、土地を入手して広くなったスペースを活用し、富岳荘の東側から北側に移設されていたのである。

今回、さらに北側へ土地が広がったことにより、執筆の部屋が中途半端な位置になってしまったので、再び移設が検討されることになった。同時に、記念館の全体的な整備、耐震補強や劣化箇所の改修および展示室の新設等の議論が開始されている。

平成十七年十一月二十四日、記念館の展示に関して業者を交えた最初の会合が開かれた。このとき、廣池千九郎記念館副館長の井出元氏より「畑毛記念館展示について」と題する資料をもとに、当記念館の概要が周知されている。資料の内容は次のとおり。

一 谷川記念館と畑毛記念館

谷川記念館・霊肉併済

畑毛記念館・友自遠方来 皆自得道還

二 畑毛記念館の構成

- (一) 『道徳科学の論文』編纂の部屋・展示（論文編纂の部屋を残すという遺志）
- (二) 富岳荘・富岳荘建設に示された教訓

三 展示内容の概要

(一) 常設展示

① 畑毛温泉とのかかわり

明治期・大正期・昭和期

② 『論文』執筆編纂の経緯

・資料収集・構想・執筆・編纂 浄書 謄写版・初版 追加文・第二版・新版論文

③ 『論文』執筆の様子

・再現展示

④ 『論文』執筆の姿に見る廣池千九郎博士の遺志

⑤ 『論文』編纂の部屋を後世に遺そうとした理由

⑥ 富岳荘を建設した意義と経緯

・「四 富岳荘建設に関する廣池千九郎博士の言葉」参照

(二) 企画展示・その他

① 廣池千九郎博士の学問的業績（企画展示）

② 視聴覚機材による畑毛記念館およびモラロジー活動の紹介

・パンフレット・展示説明の資料

・廣池博士およびモラロジー関係の文献（現在出版されているもの）

四 富岳荘建設に関する廣池千九郎博士の言葉（井出大著『晩年の廣池千九郎博士』より）

（※筆者注 以下は図書の引用であり省略する）

当資料をこうして見ると、展示の設計がほとんどこの線によって形づくられていったことがよくわかる。

業者の乃村工藝社は、すでに廣池千九郎記念館と同谷川記念館の展示を手がけていて、廣池に関する知識や材料に豊富な蓄積を持ち、それが頼りにされて今回も参画することになった。本会合ではさっそく、「畑毛記念館の持つ意味を形にすること」を課題として記念館のゾーニングを依頼されている。

十二月六日には現地視察が行われた。参加者は、記念館側からは石川恭治事務長と筆者、乃村工藝社からは、横山昌昇、桐岡栄、堀越さやかかの三氏であった。当日は記念館内外の入念な調査を行った上、当記念館について筆者から次のように説明されている。

① 畑毛記念館の特色

・廣池千九郎自らが記念館として残すことを指示しており、それが五館のうちで際立っている。

② 事跡の二面性

・（大正期）病苦と窮乏の中での壮絶な執筆活動。命と魂を打ち込んだ。

・（昭和期）事を成し晩年を迎えた円熟期の別荘生活。没後のために教訓を残した。

③ 客層・客質

・ 柏の廣池千九郎記念館や同谷川記念館で見られるような廣池に関する予備知識のない来館者はごく限られている。モラロジの学習がある程度進んでいて、その上さらに道を求めて来館する人が多い。

④ テーマ

・ 「原典発祥の地」「皆自得道還」（みなおのすからみちをえてかえる）

⑤ 展示概念

・ 教訓にあるように本末を間違えないように。教訓を形にする。
 ・ 道徳実行の糧となるような展示。

・ 来館者の関心を喚起するための演出は不要。質実剛健であること。

以上である。なお調査終了後、井出元氏より、「廣池千九郎が今にも出てきそうな雰囲気（そこにいるような感じ）をつくるように」との要望が追加された。

その後、執筆の部屋移設に関する検討が進められている。候補地は複数あったが、最終的に、廣池が指示した本来の場所である富岳荘の床の間の後ろ（富岳荘の東側）に決まった。雨水の問題について建設技術の向上により解決の目処が立っていたことも大きい。何よりも廣池の方針に基づく真姿を顕現することが決断の拠り所になったのである。ただし、覆い屋を架ける際のスぺース上の問題から、執筆の部屋に付属していたトイレは撤去されることになった。

続いて平成十八年四月、廣池千九郎記念館では、モラロジ研究所事務局からの要請に従い、畑毛記念館における展示の基本構想（文書）を作成した。内容は次のとおりである。

一、記念館全体構想について

① できる限り昭和十三年建設当時の原形を保持する。

・歴史的建造物活用型展示室として位置づける（保存と活用の両立。原形を活用した展示）。
・将来的に建設当時の状態に復元する可能性を考慮し、今回の展示室造成は最終的な形態ではないものとして、大規模な改修は行わないこととする。

・別館の敷地を活用するなど、将来的に展示・教育活動のスペース拡充が可能であることを念頭に置き、今回の展示量は富岳荘の保存に支障のない範囲に抑える。

・展示室は靴を脱いで見学するようにする（素足に対応した畳かカーペット敷にする）。

② 台所は縮小して残す（お茶出しに対応）。

③ 浴室は残さない。展示・自学・収蔵等のスペースとして活用する。

④ 展示室の占める面積は、できるだけ広くとる。押入れ（二畳分）スペースは展示室側に使用する。台所を縮小したことにより生じたスペースも展示室として使用する。

二、展示室の内容について

① 人形等による再現（例 琴景舎の離れの一室で臥床中の千九郎へ大正十三年）

② 廣池千九郎の学問的業績（ビデオ、展示 ↓ 谷川記念館と同様なもの）

③ 事跡、教訓

④ 富岳荘における配慮・エピソード

- ・建設スピード、当時においてのベニヤ板の使用など

- ・寝たまま富士山が見える配慮、池の配置等、門人たちの博士に対する配慮

- ・資材の使用法、柱・梁と床柱

⑤ 一角に、静かに論文を読んで黙考できる（更生館的な）スペースを作りたい。

一の①の内容は、富岳荘へ手を入れることを最小限に抑えることを意図している。「歴史的建造物活用型展示室」とは、建造物の保存を第一義とし、建物の一部に展示室を設けることによって管理や教育などに寄与しようとするものである。いずれは富岳荘とは別棟に専用の展示室が設けられることを期待し、創建当時の元通りに戻すことを想定しつつ、今回は建物になるべく改変を加えないで小規模な展示にとどめようという考えであった。

しかし最終的には、原形を極力留めることよりも、大いに活用する方向に路線が定められ、富岳荘の展示室は床を取り外してコンクリートを打つなど、大掛かりな改修が施されることになった。靴を脱いで上がるように考えていた展示室内も、土足で上がる方式に改まった。車椅子による来館を想定してのバリアフリー化の一環である。

保存の観点から考えれば、今回の改修はかなり原形を改変しているので「文化財の損壊」という問題を背負うことになった。しかし検討の過程では、富岳荘を一部だけ残してあとは解体してしまう計画もあっただけに、外形がすべて残されただけでもよかったとも考えうる。一方、活用の観点から考えれば、大いに有効であったといえよう。改修の可否は、現時点での判断は難しく、後世の評価をまちたいところである。



改修後の畑毛記念館

二の②以降はおおむねこのとおりに進められた。なお、改修と平行して富岳荘は解体修理され、耐震補強の施工と、戦後に増築された部分の撤去が行われている。

こうして平成二十年(二〇〇八)三月、一新された畑毛記念館が開館した。

四、改修後の畑毛記念館

(一) 全体的要点

畑毛記念館という文化財は、「移転保存型」の執筆の部屋と「現地保存型」の富岳荘との複合施設であり、今回オープンした展示室は、「歴史的建造物活用型展示室」に分類される。執筆の部屋はもちろん、今回展示室を設けることになった富岳荘も、建物そのものが展示品たる「資料」なのであって、当記念館は野外博物館的要素を持っている。となると、記念館の所在する空間が収蔵を兼ねた展示室というわけであり、保存および展示の効果を考慮して、周囲の環境も一体的に検討される必要があった。

今回の整備では、懸案だった執筆の部屋周辺の水気は工事によって解決され、両建造物も解体修理されて耐震強度向上などの防災措置が入念に施された。執筆の部屋にはさらに全面的な覆いが架けられ、劣化対策も万全となっている。広くなった庭園は、開放的な芝地に拡大された池とほどよい植栽が配され、杉革張りの建造物とよく調和して、雰囲気には歴史的な重みがあり、それでいて明るく爽快感がある。

講堂側に新たに設けられた門の位置からは、施設案内サイン「廣池千九郎畑毛記念館」とともに、このような全体像が一望できるようになっていて、展示効果は格段によくなったといえる。

外面はこのくらいにして、これより建物の中に入り、内部の展示について主な論点を取り上げていきたい。はじめに、注目すべきと思われた基本方針をいくつかあげておく。

一つ目は、呼称に表れた廣池千九郎の扱い方である。展示の解説文における廣池の呼称は、「廣池千九郎博士」あるいは「廣池博士」となっている。一方、柏の廣池千九郎記念館では「廣池千九郎」あるいは「千九郎」であり、谷川記念館では「廣池千九郎」あるいは「廣池」となっていて、姓名だけの呼び方であった。それに対して、畑毛では「博士」をつけて呼ぶ。なぜかという点、先に現地視察のところで記したように、畑毛記念館の性格および客層・客質がほかとは著しく異なっているからである。当記念館は、ある程度モラロジーを知った人が道を求めて来館し、道を得て還るということを想定して成立した。事実、大部分の来館者は廣池の事跡に学び、感化を受けようとする人々であり、教養・娯楽の性格は相対的に薄くなっている。そこで展示の表現も、第三者的に「廣池」や「千九郎」と呼ぶのではなく、教えを受ける立場として、実際に門人たちが敬意を込めて使用してきた「廣池博士」という呼称を使用することにしたのである。⁴⁰

次に解説文についてであるが、柏や谷川の展示は、資料的印象的な展示が重視され、解説文の分量は少な

めに設定されていた。現代人は活字離れが進行していて、文字が多すぎると見学者に読んでもらえなくなる恐れがあったからである。しかし畑毛記念館は上記のような性格からして、解説文もじっくり読まれるであろうことが予想されたため、この二館に比べて文字は多めに設定されている⁽⁴¹⁾。

それから、時代の明確な区分けについて考慮している点である。前述のように、廣池の畑毛における事跡は、明治・大正・昭和の三期に分かれて断続的に続いている。そのせいで事跡を学習する人々に時期的な混乱が見られることがあった。特に大正期と昭和期との間に顕著である。というのも、大正期は十二年から十四年であり、昭和期は十三年であるため十三年という年が両方にあるため数字が重なり、どちらの時代のことなのかわからなくなったり間違えたりするのである。

そこで時代の混乱を避けて明確に区分けするため、時代ごとに空間を一つずつつくり、物理的に三つに分離することを構想した⁽⁴²⁾。展示室には壁面が三面あることを活用し、最終的には次のような内容ごとに区分けされている。

ゾーン① 畑毛温泉との関わりとモラロジー形成の沿革

ゾーン② 大正期の『道徳科学の論文』執筆とその部屋

ゾーン③ 昭和期の富岳荘時代

以上、管見の及ぶ範囲で畑毛記念館の全体的要点について述べてきた。これ以降は実際の展示の動線に従い、必要に応じて論点を取り上げていきたい。

(二) エントランス

和風建築の富岳荘の玄関を入ると、中は直ちに近代的な展示室となっている。エントランスには廣池が表札に記した「友自遠方来 皆自得道還」(友遠方より来り 皆自ら道を得て還る)のことは布地の幕に大きく掲げ、畑毛記念館のテーマを明示した。と同時に、その裏面に廣池が表札の裏面にはじめに書いた言葉「徳不孤 必有隣」(徳は孤ならず 必ず隣あり)を掲げ、ちょうど表裏の関係で見ることができるようになっている。帰り際に見えるという効果もある。

(三) ゾーン「執筆背景」

ここは前述のゾーン①にあたる。はじめに、「畑毛温泉と廣池千九郎」という見出しでこの関係を大まかに述べている。次に、「モラロジ―(道徳科学)の背景」ということで、モラロジ―について、創建者廣池の研究遍歴、および当時の時代背景について述べ、廣池の略年譜が続く。そして柏や谷川と同様に、「廣池千九郎博士著作一覽」が見られるようになっていく。

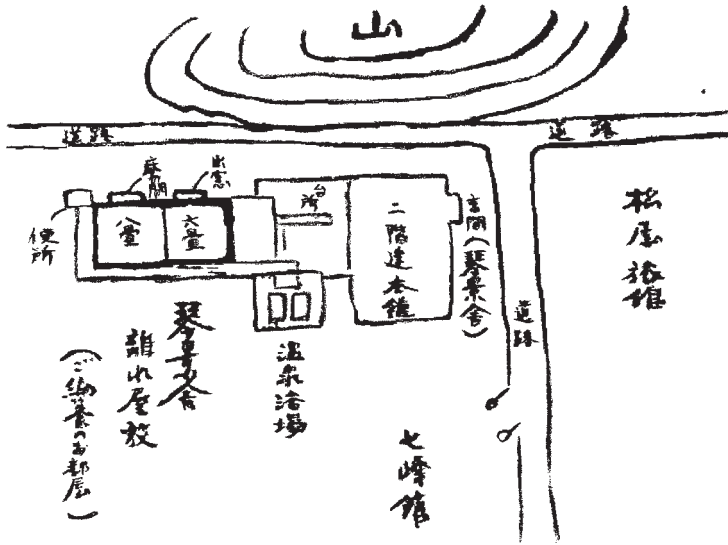
ここでの展示は、次に来る主要展示である『論文』執筆の前段階として、まず畑毛温泉との関係と人物の全体像を文章から知り、『論文』の前提にはどのような学問的蓄積があったのかを、図書の一覧表と代表的な図書の实物によって視覚的に理解することを目的としている。この著作一覽は、「一覽」といながらも『論文』やそれ以降に刊行した図書はあげられていない。これはそもそも『論文』の前提としての「学問的業績」をまとめたものであり、そのため今回も展示の趣旨によく適合する形で使用することができた。

④ ゾーン「執筆の間」

ここは前述のゾーン②にあたり、『論文』執筆と本書の内容および刊行について展示している。

はじめに、旅館「琴景舎」に関する展示についてやや詳しく述べておきたい。関連の展示は、「記念館と琴景舎との位置相関地図」と「琴景舎位置図」の図面二枚である。一枚目の「位置相関地図」を掲げた事情は次のとおり。執筆の部屋は執筆当時、地図で示したように現在地の記念館とは別の場所であり、琴景舎の位置にあった。そこから二度の移築を経て現在地に至ったのである。⁴³しかし、このことが誤解されて、執筆の部屋がはじめから現在地にあったものと思いつまれているケースが見られた。⁴⁴また、琴景舎は旅館そのものがなくなっていて、旧所在地は現在、更地になっている。⁴⁵今はよいとしても、将来的に琴景舎の位置さえもわからなくなる可能性がないともいいきれない。そこで地図を用いて琴景舎の位置を明示し、現在地との相関が明瞭に理解できるようにした。

次の「琴景舎位置図」は、井出大が描いた図の写しを用いている。琴景舎の部屋配置を知りうる図面は、今ではこの井出大の筆による一枚しか残されていないため大変貴重な存在である。⁴⁶前掲の廣池富の回想には、「父の部屋は階下で、北向きの縁側が温泉を挟んで母屋につづき、私たちの部屋は母屋の階段を登ると南が縁側で、父の部屋の上にあった。北と西に窓があつて明るかったが、西日がさすので午後暑かった⁴⁷」。また「琴景舎の向かつて右手に小高い山があつて、山の公園」といわれ、登った所に二室の新しい別館が建てられてあつた⁴⁸とあり、図面の琴景舎の配置は、明治四十四年の段階とも一致すると思われる。両者を合わせて用いることで琴景舎の様子を知るにはさらに効果的であろう。ただし井出の図にはここにいう山の上の「二室の別館」は記されていない。なお、図中にも文中にも記された山は、昭和に入ってから削り取られ



「琴景舎位置図」(井出大筆)

て富岳荘建設の頃にはなくなっている。⁽⁴⁹⁾

続いて、造形（ミニチュア模型）に関する検討経過を記しておきたい。『論文』執筆当時の廣池と部屋の様子を模型を用いて再現した。廣池は座卓に向かって正座の状態で執筆中である。中田や香川の証言には廣池は寝たまま仰向けに執筆することが多く、造形化についても従来から寝た状態で行っていた希望もあった。しかし、執筆は本来座って行うものであるし、寝た状態の人数にするとその印象が強すぎてイメージを固定してしまう恐れがあるということで、座った状態で行くことになったのである。⁽⁵⁰⁾問題は廣池の座卓の位置である。現存する写真からは場所をはっきりと特定することができないため、日当たりや空間などから類推することによって位置が定められた。

造形などの展示の背面にあたる壁面には、『論文』の全目次が一望できるように配した。はじめ

は壁に直接プリントすることなどが検討されていたが、壁面に倉庫の扉がつくられることになったので、七枚のスクリーンを上から垂らす方法に変更されている。『論文』は目次の一つ一つが文章のように長めになっていて、目次だけを読んでいても内容がかなりの程度まで理解できるように工夫されている。そこで来館者には『論文』がどのような体系をもっているかを一望してもらい、内容を理解してもらおうようにするために目次を掲示することにしたのである。⁽⁵¹⁾

次に、「執筆の様子」。ここでは香川初音の回想と廣池の日記の一文の写真および解説文、それに当時の写真一枚である。香川の回想は大正期の事跡のところでも引用したものと同一である。文章が長くなったが、前述のように、この来館者は文章をしっかりと読んでくれるであろうことを予想し、またそれを期待して原文に近い形で紹介している。

続いて「『道徳科学の論文』の刊行」。ここではまず『論文』原稿の複製を展示し、草稿に修正が加えられて現在の形になっていく様子を示した。それから序文を寄せた三人の写真、昭和三年十一月三日の神宮参拝に関する資料と『論文』献納先目録の写真等を展示している。⁽⁵²⁾

(五) ゾーン「富岳荘」

正確にいうと、ここは「ゾーン富岳荘の時代」と「ゾーン富岳荘」に別れている。前者は、富岳荘建設の経緯と最晩年の廣池の動向を、図、写真、表などの展示によって伝えている。内容についてはすでに詳述しているので触れないこととして、ここでは後者の方に注目しておきたい。展示ケースのすぐ横の壁に扉が設けられ、展示室に居ながら富岳荘内部を一望できるようになっている。



改修前の富岳荘の床の間

富岳荘内部は、廣池没後になりに物が増えていた。壁面には教訓を記した紙が張り巡らされ、さらにその手前に写真額などがかけられているという状況であった。床の間もだんだん物が増え、最終的に写真のようにになっていた。今回の改修ではこれらを撤去し、原則的に廣池在世当時にそこにあったもの以外は置かないという方針をとった。床の間も整理され、御神号の掛け軸など、当時存在したものが復元されている。

(六) 『論文』執筆の部屋の保存⁽³³⁾

今回の改修は、執筆の部屋をもとの位置に戻したとともに、保存に万全を期したことが意義深い。執筆の部屋は、富岳荘とつながる屋根と壁によって、全体を完全に覆われる形になった。同時に富岳荘の廊下から階段の通路が設けられ、富岳荘内部から直接執筆の部屋の空間へ上がるようになっていた。

執筆の部屋も当時そこにあったもの以外は置かない方針を採り、物品の多くを撤去したが、「慈眼視衆生」と書か

れた額のみは残した。廣池が『論文』を執筆した当時、部屋に備え付けられていたものがこの言葉を記した掛け軸であり、廣池はこの観音經の文言に親しんでいたという⁵⁴。その当時の掛け軸は失われてしまっているので、改修時に掛けられていたのは後世の複製品であるものの、すでにそれにも歴史があるので継続して用いることとしている。

(七) 学習室の新設

執筆の部屋に併設して『論文』を読むための部屋が新設された。

この部屋には『論文』と必要最小限のものしか置いておらず、「『論文』を読むためだけの」部屋といってもよい。また、くつろいだ状態ではなく、心身を正して読むことを想定しているので椅子は坐面が固くて背もたれが直角にできているものをあえて用いている。

執筆の部屋から何かを感じると同時にその場で原典を読むことによって、モラロジーの理解が深まることが期待されている。

おわりに——成果と課題——

以上、廣池の事跡をふりかえって富岳荘建設当時に見られた保存と展示の意識を考察し、それをふまえた今回の改修事業を検討した。

当事業の成果についていえば、やはり廣池の趣旨に立ち返って執筆の部屋をもとの場所にもどすことがで

きたことを第一にあげておきたい。次に保存の観点では、耐震補強や劣化対策など、執筆の部屋・富岳荘ともに万全を期すことができたといえる。展示については、今まで富岳荘や執筆の部屋の壁面などに断片的に掲示するだけだったものが、新たに展示室が設けられて一括して体系的に展開できたことによる効果は絶大であったというほかない。また、周囲の環境も平行して整備され、外面的にも景観と建造物の調和がとれたよい展示が構成された。この点は設計者の菊地重明氏によるところが大きい。

学習室をはじめその他の付属施設が充実したことにより、活用の幅も広げられた。すでに講堂も開設されており、大小さまざまな教育活動にも寄与することが期待されることである。

その一方で次のような課題も残した。

保存の面でいうと今回の事業では、執筆の部屋、富岳荘ともに、保存の都合上または展示室を設ける関係で、建物の一部撤去や内装の変更等が行われている。これらは原形そのものの保存という意味ではマイナスになるものの、十分な検討が加えられたものであり、現時点での妥当な判断であったといえる。危惧されるのは、これまでのものも含め、このような変更の経緯が後世に十分伝わらず、資料の保存と変更に対する定見が浸透しないという事態である。場当たりのな変更を繰り返しては文化的価値を損なうことにもなりかねない。

また、立派な施設を作ったけれども来館者がいないなどということになっては事業の意味が疑われてしまう。モラロジ―学習の裾野を広げ、学習者が次の段階を求めて来館するという機会づくりを平行して進めていかななくてはならない。その際、畑毛記念館が持つ温泉という、廣池と来館者をつなぐ媒体であると同時に種々の効能を有する資産をどう活用していくのかについても有用な見識が求められるところである。

廣池博士の遺志が正しく反映され、畑毛記念館が生命を保ち続けるために、以上のような博物館学的研究の継続発展が必要と思われる所以である。

註

- (1) 井出元「廣池千九郎記念館だより」⑦ 廣池千九郎記念館—総論『モラロジー研究所所報』平成二十年四月号、モラロジー研究所、六頁
- (2) 井出元「廣池千九郎記念館だより」⑧ 廣池千九郎畑毛記念館『モラロジー研究所所報』平成二十年六月号、モラロジー研究所、一〇頁
- (3) 井出大『随行記録 晩年の廣池千九郎博士』広池学園出版部、平成元年、三三三頁
- (4) 廣池は最晩年に至る長期にわたり日記を記しているが、明治期の畑毛温泉訪問のころについては記述がない。大正期および昭和期については書き残されている。
- (5) 中田中『思いでの旅』広池学園事業部、昭和三十五年、三頁。括弧内は引用者。
- (6) 「廣池博士が明治三十五年、疲れ果てたお体を癒すために訪ねられたのが畑毛温泉」(モラロジー研究所編『温故知新』広池学園事業部、昭和五十二年、四七頁)
- (7) 「千九郎と畑毛の関係は、明治三十五年にさかのぼる」(モラロジー研究所編刊『伝記 廣池千九郎』平成十三年、四八二頁)。なお同書には「続いて三十七年、三十八年と療養に来ている。明治四十四年の時は、八月に十日間ほど家族四人で滞在している」とその後の訪問を記している(同頁)。
- (8) 「大先生の最初の御来浴は明治三十六年十月二十六日で、東洋法制史の御著述で積年の御疲労が発せられ、神経衰弱の兆候で御静養遊ばされたことが私の父の日記に見えております」(「廣池博士と畑毛温泉」『モラロジー研究所所報』第三卷第七号、モラロジー研究所、昭和三十三年十月、七頁)。「私の父」は井出登のこと。この一文は、静の子である井出大の前掲書(一七三頁)に引用されている。
- (9) 「大先生四十二才の折に、熱海温泉富士屋旅館から、十国峠を御乗馬で参られたのを最初」(「故廣池先生と畑毛温泉」『麗澤』第三号、麗澤会本部、昭和二十二年八月、二五頁)、と「博士が早稲田大学講師、御齡四十二歳の御時から」(「廣池博士と畑毛温泉」『麗澤』二十五号、麗澤会、昭和三十年、一四頁)。これらには「父の日記」への言及はなく、登による記録は参照されていなかったようである。井出大は年齢を修正の上、前者の方も同様に引用し

- ている（前掲書、一七六頁）。
- (10) ビデオ「畑毛記念館 皆自得道還」プロデューサー・横田義信・米本憲司、脚本演出・柴田健治、出演・井出大、企画・モラロジー研究所、製作・株式会社カメオ、昭和六十一年
- (11) 井出元前掲「廣池千九郎記念館だより⑧ 畑毛記念館」一〇頁
- (12) これらの書簡はすべて廣池千九郎記念館蔵。津軽英磨のものは、宛先住所が鎌倉の淨智寺と記されている封書に、「受信人且下左に移転ス 伊豆国田方郡函南村字畑毛高橋方 廣池千九郎」と書かれた付箋が貼られた状態である。
- (13) 琴景舎の宿帳は複写されたものが廣池千九郎記念館に収められている。
- (14) 廣池富「学祖の家庭生活⑥ 親子で遊んだ畑毛温泉」モラロジー研究所『れいろう』昭和五十二年九月号、五二頁。のちに、廣池富『父 廣池千九郎 その愛と家庭生活』廣池学園出版部、昭和六十一年に収録。
- (15) 同書、同頁
- (16) 同書、五三―五四頁
- (17) モラロジー研究所編『廣池千九郎日記③』廣池学園出版部、昭和六十一年、八四頁
- (18) 中田中前掲『思いでの旅』三頁
- (19) 井出元前掲「廣池千九郎記念館だより⑧」一〇頁
- (20) 中田中前掲『思いでの旅』四頁
- (21) 中田中「スライドに偲ぶ廣池博士」『社会教育資料』第二十六号、道徳科学研究所、昭和三十四年九月、一一六頁
- (22) 香川景三郎・香川初音『まことの心』道徳科学研究所、昭和四十四年、三〇頁
- (23) 同書、三一頁。なお、この箇所は一部修正の上、畑毛記念館の展示解説文にも用いている。
- (24) 大正十四年七月二十七日の日記には「今一段聖者とならずば、モラルサイエンスに生命なきこと」「絶対信仰をなして撓まず。必ずモラルサイエンスに極度の生命を与うること」（前掲『廣池千九郎日記』③、一五〇―一五一頁）などと記し、さらなる品性陶冶と原稿への入魂を誓っていることが見える。この日記は畑毛記念館に原文の写真が展示されている。ただし日記を書いた場所は畑毛ではない。さらに、香川は『論文』の一字一字には、廣池博士の人類救済の熱烈な尊い血潮が脈々と流れ、拝読させていただく私どもの精神も肉体も、それによって救われ、助けられることは確実と思わせていただきました」と語っている（香川前掲書、三五頁）。なお、こうした『論文』執筆の真摯な様子は、井出静の前掲「故廣池先生と畑毛温泉」および同「廣池博士と畑毛温泉」、中田中前掲「スライドに偲ぶ廣池博士」、同『思いでの旅』等からもうかがうことが

できる。

- (25) 琴景舎満室から別荘完成までの経緯は井出静前掲「廣池博士と畑毛温泉」参照。名称「富岳荘」は、はじめに「富士見荘」として土瓶敷に書いたが、「富士は見るものではない、心で観て、あの富士のような人格をと思い反省するものじゃ」（井出大前掲『随行記録 晩年の廣池千九郎博士』一八六頁）とあって土瓶敷を裏返し「富岳荘」と書き直した。この土瓶敷を富岳荘の表札に用いている。
- (26) 井出大前掲書、三三二頁
- (27) 同書、一八七頁
- (28) 同書、三三三頁
- (29) 同書、三三四頁
- (30) 同書、同頁
- (31) 加藤有次ほか編『新版博物館学講座9 博物館展示法』雄山閣出版、平成十二年、二八頁
- (32) 井出静前掲「廣池博士と畑毛温泉」一七頁
- (33) 井出大前掲書、一八五頁
- (34) 同書、一八六頁
- (35) 井出静前掲「廣池博士と畑毛温泉」一八頁。現在でも富岳荘からは、部屋で横になったまま富士山が見える構造になっている。しかし、近年記念館敷地内に設置した休憩所の屋根がかかってしまい横になった状態では見えなくなった。
- (36) 同書、同頁
- (37) 同書、二〇頁
- (38) 同書、一七頁
- (39) 同書、一八頁
- (40) 「博士」を付する件は井出元氏の考えによる。
- (41) 解説文ははじめ、全体を前半と後半の二つに分け、前半を筆者が、後半を井出元氏が執筆担当した。全体の解説文がそろったところで修正を重ね、最終的な文章の確定は井出氏の判断によった。
- (42) 三つの時代を物理的に三区分する件は、乃村工藝社に対する筆者の説明の中に見られた。
- (43) 平成十七年三月八日、駒の湯源泉荘（琴景舎の後継）社長高橋誠氏にインタビューを行った。氏によると、執筆の部屋すなわち琴景舎の離れは、大正期の廣池使用後、旅館から切り離され、別の場所へ移築され物置として使用していたとのことある（この段階を撮影した写真も展示している）。廣池側がこれを譲り受け、富岳荘敷地内へ移築、続いて昭和五十年ごろ敷地内で移築、そして今回の移築と合計四回移築していることになる。
- (44) 筆者がこのような間違った認識にもとづく話を直接聞いている。
- (45) 琴景舎は「高橋旅館」、続いて「駒の湯」と改名し、さらに近隣に「駒の湯源泉荘」という別館を開館した。

その後、本館の駒の湯の方を閉め、経営を駒の湯源泉荘に一本化している。

(46) 註(43)と同じく高橋氏によると、琴景舎の図面は旅館に残されていないという。

(47) 廣池富前掲書、五三頁

(48) 同書、五五頁

(49) 高橋氏によると昭和七・八年頃のことという。註

(43) に合わせて聞いた。

(50) この主張は主に井出元氏による。

(51) 同氏の発意による。

(52) 神宮参拝に関する展示は不要とする意見もあったが、プランナーの吉田雅之氏による『論文』の刊行は、神宮に奉告・報恩するところまでいくことよって大きな意味がある」という趣旨の発言により、皆が納得。展示することになった。

(53) 執筆の部屋の名前はほかに「論文編纂のお部屋」、「論文」執筆(編纂)の間、「論文」執筆(編纂)の室など様々な用いられ方があった。今回の整備を機に記念館内での検討を経て、これらを統一して「論文」執筆の部屋」とすることになった。

(54) 香川前掲書、二九頁

※「廣池」と「広池」の書体の相違は原文の表記による。